「『坂の上の雲』のまち松山」の道

～『坂の上の雲』を軸とした21世紀のまちづくり～

愛媛県松山市　坂の上の雲まちづくり担当部長付

1．はじめに

松山市は、愛媛県の中央部、松山平野にあり、東は西日本の最高峰石鎚山を擁する四国山地を背景としまして、西は波静かな国立公園瀬戸内海が望めます。

これまで、政治・経済の中心都市として成長してきており、俳人正岡子規をはじめ、多くの文人を輩出するなど地方文化の拠点としての役割も果たしてきました。

平成12年には中核市へ、17年には、隣接する北条市・中島町との合併で、四国初の50万都市となりました。

図１　松山市の位置

写真１　松山市の風景

2．『坂の上の雲』のまちづくり

「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている。その列島のなかの一つの島が四国であり、四国は、讃岐、阿波、土佐、伊予にわかれている。伊予の首邑は松山。城は松山城という。」と冒頭にある司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』。

写真２　小説『坂の上の雲』全６巻（文藝春秋）

ここには、松山出身の秋山好古・真之兄弟、正岡子規を中心としながら、近代国家の形成に奮励した日本を明治という大きな時代の流れのなかで描かれています。長い封建時代から開放され、西欧諸国に追いつこうと身分を越えて一つの目標を共有した時代にあって、懸命に国づくりを行った明治人が持った気概や情熱、目標に向って進む行動力や高い理想、こうした目標をみつめてのぼっていった生き方に学ぶまちづくり、これが本市の取組む「『坂の上の雲』を軸とした21世紀のまちづくり」です。

写真３　左から　秋山 好古・真之兄弟　正岡 子規

3．フィールドミュージアム構想

このまちづくりについては、平成11年度に基本構想、翌12年度に基本計画を策定しています。

また、13年度に策定した、第5次松山市総合計画基本構想では、基本理念に「『坂の上の雲』を目指して」を掲げており、市民と行政が一体となって、松山らしさを顕在化していくまちづくりに取り組んでいます。

まちづくりの手法は、小説『坂の上の雲』に描かれた3人の主人公を輩出した松山の風土や歴史、文化を再発見し、地域の特性や実情に沿ったフィールドミュージアムを展開することにあります。

『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想は、センターゾーンと、その外縁部に配置される6つのサブ・センターゾーン、そして各ゾーン間を補間する中継ポイントであるサテライトで構成されます。

これらの総合的なネットワークによって「まち全体が博物館」としての拡がりを形成するものです。

それぞれの構成要素には、日本三大平山城と呼ばれる松山城を中心とした松山城周辺センターゾーン、明治27年に建造され、日本最古の温泉の一つとして知られている道後温泉を有する道後温泉サブ・センターゾーン、瀬戸内の港町・潮騒文化が残る三津浜・梅津寺サブ・センターゾーン、豊かな自然を楽しむ松山総合公園サブ・センターゾーン、遍路文化と四季折々の自然と豊かな里山文化が息づく久谷・砥部サブ・センターゾーン、瀬戸内海国立公園に属する風光明媚な島々である忽那諸島サブ・センターゾーン、中世河野氏の本拠地として栄え、松山と結びつきの強い風早サブ・センターゾーン、そして、小説ゆかりの地域資源を含むサテライトとして、ロシア人墓地や一草庵、庚申庵などがあります。

このような地域の特性に応じた様々な魅力を更に、地域主体の取り組みを通じて磨き上げることで、独特の雰囲気やたたずまいから物語が感じられる“松山らしいまち”が形成されます。

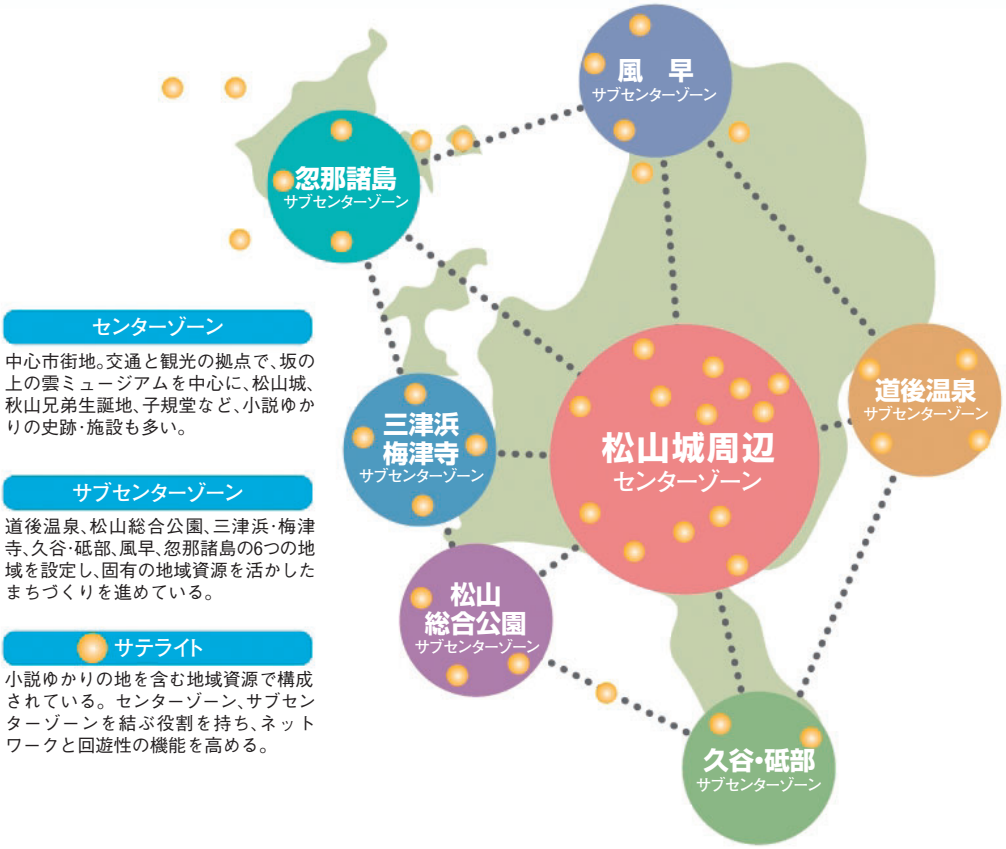

図２　『坂の上の雲』フィールドミュージアム　概念図

写真４　松山城天守閣

写真５　道後温泉

写真６　里山文化が息づく久谷

写真７　三津の渡し

写真８　河野一族ゆかりの善応寺

写真９　忽那諸島の多島美

写真 10　山頭火終焉の地、一草庵

写真 11　ロシア人墓地

4．まちづくりの取組み

このまちづくりの取組みは、まず、地域の人々が自分の住んでいる身近な資源を再発見することからと、ふるさとウォークの実施を始めました。毎年１回開催しており、今年で10回目となるものですが、年々参加者が増え、昨年は、2,300人が参加するイベントとなってきました。

写真 12　第９回お城下ウォーク（H20 年 11 月）

一方、これまで国際温泉文化都市として発展してきた経緯はありますが、近年、長期化する景気低迷の中、観光入込客数の推移を見ると、平成元年の瀬戸大橋時の569万人、平成11年のしまなみ海道開通時の609万人をピークに、H17年度に482万人まで漸減し、減少傾向がつづいており、観光産業は、厳しい状況にあります。

このような背景のなか、平成14年度には、国の進める全国都市再生のケーススタディに選定され 、また、NHK のスペシャルドラマの放映も決定されたことを契機としまして、まちづくりの全国発信と、都市観光の振興を兼ねた具体的な事業がスタートしました。

それは、松山城周辺センターゾーンと道後温泉サブ・センターゾーンを重点整備地区と位置づけ、まちづくりの中核となる施設を整備するとともに、点在する『坂の上の雲』ゆかりの史跡・施設や地域の歴史文化資源を活用した賑わい交流拠点の整備、更に、それらを誘導案内する動線の基盤整備や機能強化を都市再生整備計画としてまとめ、まちづくり交付金の採択を得て整備されました。

平成16年度から事業実施しており、事業が進展するにつれて観光入込み客数も増加基調にあります。

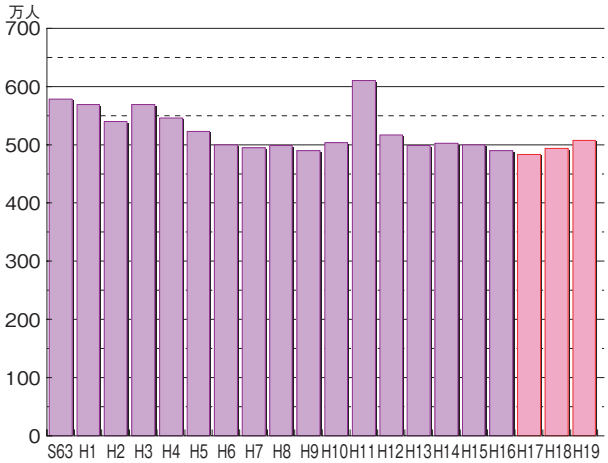

図３　松山市観光入込客数の推移

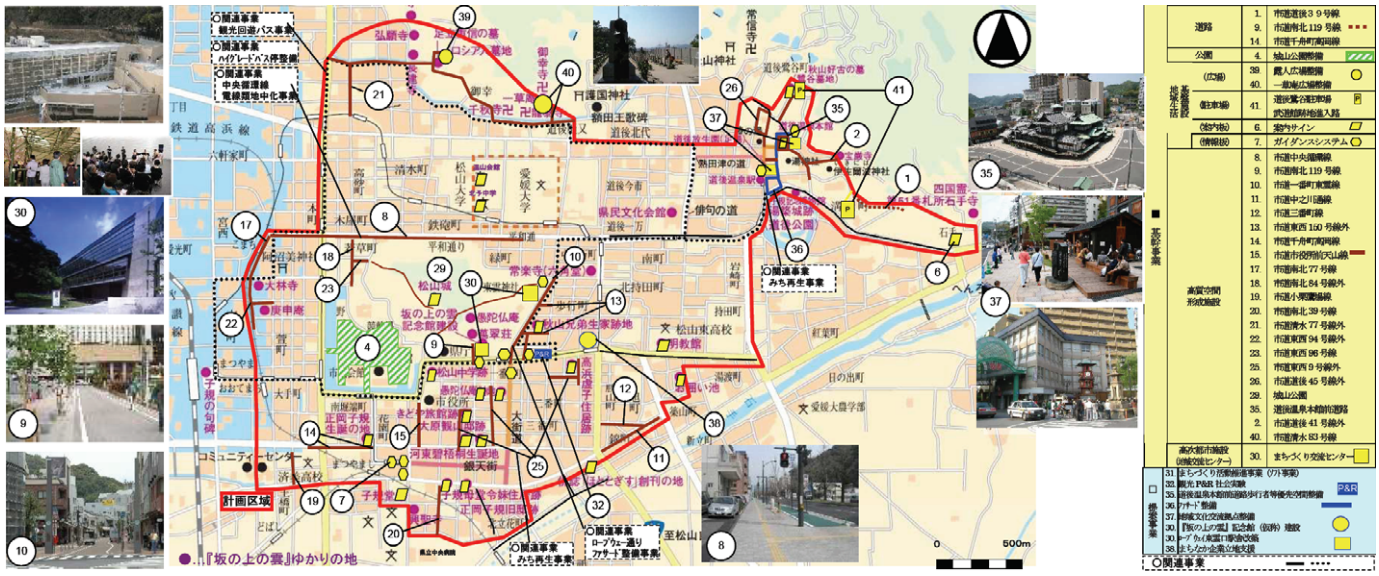

図４　まちづくり交付金（松山市中心地区）の事業概要図

5．ロープウェー通り道路景観整備

なかでも、松山城への玄関・アクセス動線であるロープウェー通り（市道一番町東雲線）の整備及びロープウェイ駅舎のバリヤフリー化整備、商店街のファサード整備が順次行われ、H18 年 4 月に完了しました。

この整備は、地元商店街が主体となって、自らの利権を調整・まちづくりの方向性を見出し、歩行者優先の再配分を伴った景観整備を行ったものです。整備の結果、センターゾーンのシンボル的な通りとしてゆったり観て・歩いて楽しい、新しい町並みに再生しています。

整備後、目に見えた効果も現れています。地方の商業地では稀な、10％以上の地価上昇が起こっています。

また、整備前後の休日の歩行者数が、3.5 倍に増えています。

更に、商店街の営業店舗数も 97 店舗から 147 店舗に増えており、通りの賑わいが創出されるとともに、資産価値も上昇した、地域の活性化につながる良い事例となっております。

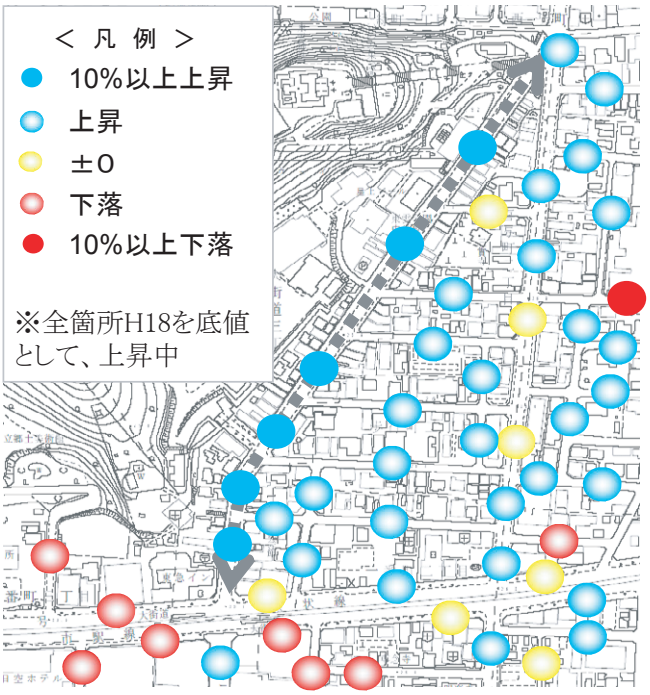

図５　路線価の変動［H20/H16 比］

写真 13　ロープウェー通りの整備状況

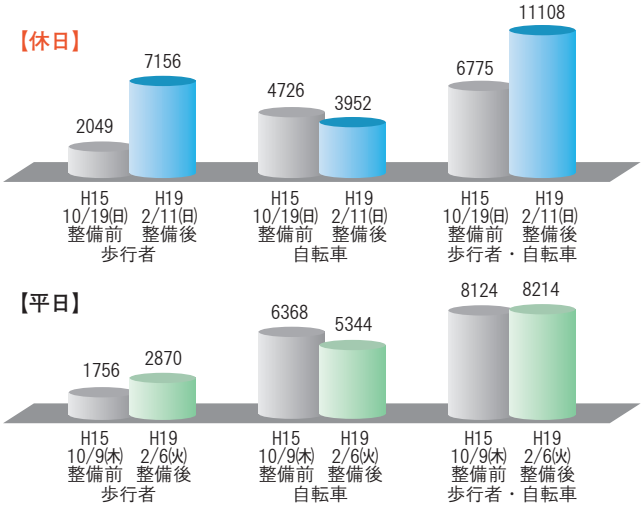

図６　歩行者数の変化

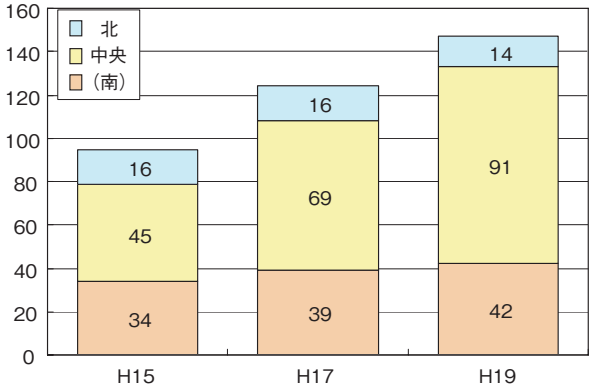

図７　営業店舗数の推移

6．道後温泉本館周辺道路景観整備

続いて、道後温泉本館周りをゆっくり回遊するための道路景観整備を行いました。

本館前の県道を裏側に迂回させ、正面を石畳で敷き詰め、広場化した歩行者空間とすることで、これまで、自動車が錯綜し、記念撮影も命がけであった所をゆかたでゆっくり回遊することができるようになりました。

現在は、この道後温泉本館周辺で、面的にファサード整備を行っています。

これは、平成18年度に都市再生モデル調査として行った、地元組織の道後温泉誇れるまちづくり協議会が策定した、景観まちづくり宣言「百年の景」、平成19年5月に策定した「まちづくり協定書」「デザインガイドライン」から提案され、事業実施しています。

今後、地域主導で「まちづくり協定書」に基づく「まちづくり」が継続されることで、更に魅力あふれる道後温泉になるものと考えています。

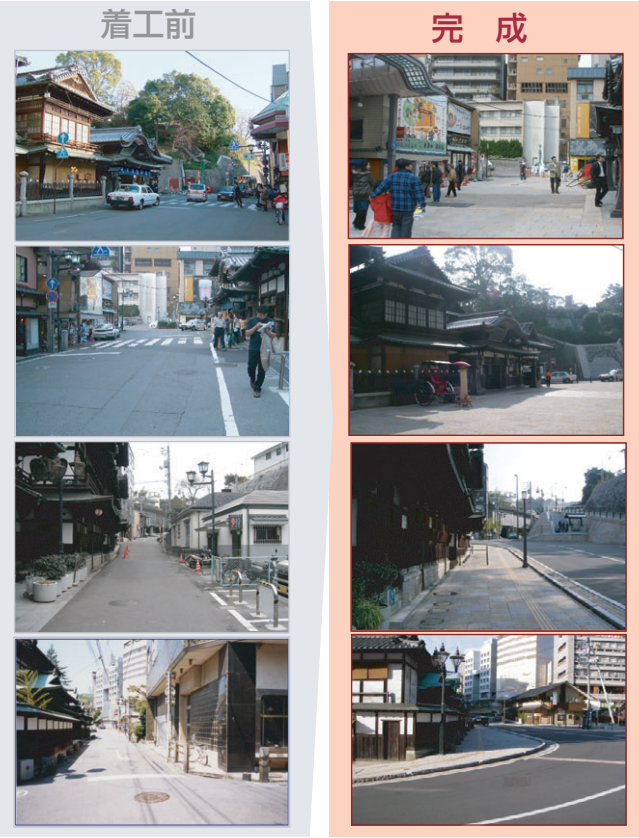

写真14　道後温泉本館周辺の整備状況

7．回遊性の高いまちづくりへ

そして、各拠点へ誘導案内するための機能強化として、案内標識やITを活用した情報板、及び、冊子制作も行っています。

案内標識は、主な交通結節点から目的地までをはじめて訪れた人でも、わかりやすく誘導するため、統一感のある案内サインです。目的地では、小説『坂の上の雲』の引用文や新聞掲載時の挿絵、往時の写真で物語を感じてもらえるような解説板を設置しています。

ITを活用した情報板は、PDPで映像による情報、電光文字で文字情報の提供、タッチパネルによる選択式の観光・民間情報の提供、フェリカやICタグを利用した携帯電話への情報提供、ポスターやパンフの従来からある紙媒体の情報提供を行う、総合情報案内端末で、欲しい情報をいつでも何処でも手に入れることができるようになり、来街者の望む場所へ誘導できるようになるものです。交通結節点の空港･港･JR、松山城や道後温泉の観光拠点、及び、次の施設への移動動線上の道路空間にも設置しています。

これらのように、道路景観整備にあわせて、市域に広がる小説ゆかりの場所へ回遊案内する手段を講じることで、訪れた方々に『坂の上の雲』のまち松山を感じていただけるのではないかと思っています。

いよいよ11月末からは、NHKスペシャルドラマ「坂の上の雲」が3年間にわたり放映されます。皆様、是非ご覧いただき、『坂の上の雲』のまち松山を訪ねてみてはいかがでしょうか。

図8　『坂の上の雲』ゆかりの地までの回遊促進整備